遠州丸に乗り込むとき持ち込み許可されたのは雑のうと飯ごうだけ、あとは着の身着のまま、友人から託された住所など書かれた紙片も没収された。

船は舞鶴港に接岸、復員はその年の九月二日。抑留生活四年。抑留中、作業開始前に大隊長よりの訓示で、祖国日本に帰るまではシベリアの松の肥やしとなってはならぬという言葉が今も脳裏から離れない。

戦後五十数年が過ぎた今日、酷寒、異国の地で今なお祖国に帰れず眠っている多くの友人のご冥福を御祈り致し、私のシベリア抑留記を終わります。

私の生きた大正 昭和 平成 七十九年

富山県　山本 祥 作

私は大正十四(一九二五)年五月七日生まれで、農家では忙しい月であった。

春から秋夏冬と大へん忙しい地方である富山県高岡市（旧射水郡佐野村）西佐野で、父「佐七郎」母「ちよ」の四男として生まれた。八人の兄弟で、私は七歳にして昭和六（一九三一）年三月母親は亡くなった。昭和七年小学校入学して昭和十五年高等科二年の卒業が間近になったある夜、暗い裸球のともる囲炉裏の端で、家族そろって夕ご飯を食べ終わると、父（生産組合長）が、皆に相談があると話を始めた。いま日本の重要な国策の一つに満州の建国があり、この大陸の新天地で活躍する満蒙開拓青少年義勇軍を募集されている。家では六人の男の子がいる、「一人でも」義勇軍に行き国策にとの話でありました。その頃は、学校では、

満蒙開拓青少年義勇軍への応募もありました。父の（一人でも）一言に、私は、親のため国のためと思い、親の元で働くもよいが、自分で生きる道を探さなくてはならないと思い、高等科二年の卒業の前に申し込みました。

昭和十五年三月二十五日出発の日が来た。部落の皆さんより出征兵士を見送る行事と同様に、神社にて式典が行われました後、近所の知人や一家一家に廻り、皆さんの見送りを受け、当年十五歳の豆戦士として出発、生まれ故郷を後にした。見送りの中には「あんな小さな子供がよくも満州に行くねえ」と話している声や、母親がいればねと言ってる声を耳にした時は、心には力がつきました。

昭和十五年三月二十六日、茨城県内原訓練所へ入所、五カ月の訓練に入り、二十四時間中すべてが訓練である。その中に満州に渡っての生活や村造りに必要な特技訓練があり、また、夜は消灯後二人ずつ一時間交替で不寝番に当たる。満蒙開拓者の養成を目的とした教育訓練であり、いま思えば内原訓練所は統一のとれた精神教育の場であったかと思います。一つの事を繰り返し繰り返し行う事を徹底してたたき込まれ、また開拓の父として称賛された、加藤完治所長の精神訓話の熱弁を聞くことの中に「衣食住の生産に努力するは善なり」との信念を持ち農の意義を明確に悟った事は今日私等開拓団員に思い出される事と思います。加藤完治先生は昭和四十二年没。八十三歳。

渡満の日近づく

そうこうするうちに八月に入り訓練期間の五カ月間が終わりに近づき、いよいよ待ちに待った渡満の準備に入った。色々な予防注射を五種、六種と受け、訓練も現地の治安状況に対応する内容で行われ、特に匪賊に対する戦闘訓練の仕上げに入った。

制服、靴、そのほか身につけるものすべてが新品で支給され制帽には桜の記章が光っていた。

昭和十五年八月二十二日、内原訓練所を出発す

る日が来た。いつもより早く起きると皆がもうはつらつとした顔をしていた。

やがてラッパの合図で訓練所の広場に集まり、壮行式が盛大に行われ、若い義勇軍の前途を祝福する名誉の言葉を色々といただき、加藤完治所長からは「よく眠り、食事は十分に注意し、健康に気をつける事と、心を合わせて事を成し義勇軍の使命を深く自覚して行動する事」等の訓示が話された。式典のあと、第十七中隊（川原中隊）二百八十二人が行進に移った。国防色の制服に桜のマークの制帽。両足の巻脚絆に身をかため、日満国旗を先頭に、川原中隊長、音楽隊が続き、銃の代わりに真新しい白木の鍬の柄をかついで足並を揃え地を踏み、胸を張り、若い開拓の豆戦士らは開拓の歌を高らかに歌い、あの雄姿はまさしく勇ましい限りであった。歌を何回も繰り返しながら内原訓練所を後にした。

内原駅より東京駅下車。宮城前広場まで街頭行進。宮城を仰ぎ、渡満の決意を固め、万歳三唱後再びパレードを続け靖国神社に参拝し、後、青山会館に着いて休んだ。翌二十三日は、東京駅から宇治山田駅まで行き、伊勢神宮を参拝し、その後、地元、高岡駅に向かった。

高岡駅にて下車「見送りの人達が沢山の中」ラッパと太鼓隊を先頭に街頭行進をし、高岡古城公園、本丸宮城に向かって、パレードが始まった。親類、親友、村の人達が一緒に横について見送り下されたあの時の事は忘れられません。（今日、戦後六十年前の事思い出すと涙がとまりません）

翌朝、氷見線にて、伏木港へ行く。伏木公会堂では見送りの人達による歓迎会に臨んだ。赤飯で昼食をすませたあと、伏木港の岸壁に横付けされている射水丸（三、〇〇〇トン級貨物船）に次々と乗船した。

本土との最後の別れである。投げた五色のテープを持ち合い、別れを惜しんでいた。出帆の汽笛と共に船は岸壁をみるみる離れていった。

泣き叫ぶ親類同僚も大きな涙を流し、「頑張れ、

頑張れ」体に気をつけるんだの声に私も泣かされた。船はだんだんと遠ざかっていった。

生まれて初めての船の旅である。やがて本土も見えなくなり、水平線が丸みをおびてきた。地球は丸いという実感がわいた。夜になって波が高くなった。船も横に揺れ始め、あちこちで気分の悪い者が出て来た。中には真っ青になって、ゲーゲとやる者が出る。私も少し悪気をした。何も見えないしけの海で二日間が過ぎた。三日目には朝鮮半島が見えてきた。そのころには皆元気になった。船は清津に立ち寄り、それから羅津に向かった。羅津港で上陸が始まり夢にまで見た大陸への第一歩を記した。羅津で一夜を明けて列車で目的地に向かった。

列車は羅津から北上す。窓から見える大陸は、ただただ広大で殺風景であった。日本列車より幅も広く、座席は三人が腰掛けられ速度も遅く、鐘をカンカンと鳴らして走っていた。牡丹江を過ぎ、ハルピン駅にくると、馬にまたがった伊藤博文公の銅像、それと肉弾三勇士の銅像があるのに驚いた。ハルピンから列車は北安省に入る。一望千里広漠たる大草原続き、野鹿の群れ、花が何十キロと見事に咲いていた。

また、現地人の部落が視界に入る。土で造った塀、草の屋根で低い居住が点々と見えてきた。

ハルピンから八時間余り北上し終着駅は海倫に着いた。下車して、北満の一歩を踏みしめた。迎えに来たトラックに便乗し三年間訓練を受ける対店大訓練所に着いた時は、昭和十五年九月一日であった。季節はすでに冬で、室内はペーチカがないと寒くていられない。夜は、持参した毛布一枚にくるまって寝た。隣の友と二人で二枚の毛布にくるまって寝た事もあった。

日課は内原訓練所で受けた訓練と同様で、中には満州語の講習もあった。夜は衛兵勤務があり、冬の衛兵勤務は非常につらい。夜中には零下三〇度から四〇度と下がる。重い防寒服に身をまとい、防寒帽の中から目だけを出すが、まつ毛が凍り、

鼻毛も凍ったが、いつ匪賊に襲われるかわからないので緊張の連続であった。

とにかく一時間の交代が長い。交代の時間がくると決まって生き返ったようになった。そうこうするうちに大陸で初めての正月がやって来た。内地とかわらぬ餅つきで、「食べる」ということが何よりも楽しかった。正月休みも過ぎたころから虱がわき出し体がかゆくなった。実にいやな気分であった。マイナス四〇度の酷寒にさらしても、夜寝床にもぐると又活動し出したのに驚いた。それに、今思えば、便所当番にて、大便は便所の中で竹の子状に次々と盛り上がっていく。糞の柱ができた。当番はつるはしで根本をはつり、それをかついで畑へ運搬したが凍っていると臭くなく、溶けるとプンプン臭くなった。

やがて春が近付き気温が上がってくると、畑や満人村の家のふちの大小便が溶け出し、あたり一面に臭気を発散するという次第であった。ちょうどこの頃農作業も忙しくなる頃で、種の蒔く時期である。

大陸には秋がなく、夏から急に冬になるので、夏の終わりに収穫に入る。

対店訓練所に入って困った事は、義勇隊員の中の愚連隊であった。夜中の寝静まった頃、兵舎に入って来て、ランプを割ったり、何か言ったりすると木刀で殴る、手に負えない連中がいた。旧軍隊でいうと二年兵である。

昭和十六年八月、満州全土で関東軍の特別大演習が実施され、我々義勇隊員も動員された。訓練所では秋の取り入れで忙しい月日であった。

十二月に入ると、零下二五、六度以下の寒い時季である。十二月九日、各小隊に集合命令が出され講堂に集まった。川原中隊長より、十二月八日、米英に宣戦布告のニュースを聞く、緊張が一気に高まった。その後治安警備も厳しくなった。

昭和十七年春頃、大東亜戦争も激しくなり、食糧増産体制の中で、訓練三年目で、作物の種蒔きが始まった。経験の積み重ねで畑仕事も能率よく

作物も良くできた。来年は開拓団に移行する話題が飛び交った。

昭和十八年四月、私達の入植地が決まった。濱江省五常県南沖河というところである。永住の地の名称を日本語で名付ける事にし、富山県の神通川の「神」と、群馬県の利根川の「利」をとり、神利開拓団と川原団長が名付けた。この地区は、二万七千町歩余りで、南北長く、中央には河が流れ、流域地帯は豊かで、水稲作りに適しておりました。

昭和十九年、二十年、その頃太平洋戦争もだんだんと激しくなり、徴兵検査が一年繰り上げされ、開拓に生涯の夢をもった働き盛りの青年を根こそぎに軍隊に召集された。私は「ノンジヤン」部隊に入隊した。

昭和二十年八月、日ソ開戦により、ソ連軍が侵略に入り、開拓団にて五族協和、王道楽土の建設に励んでいた老人、婦女子達も戦禍に巻き込まれ、その夢は無残にして打ち砕かれた。

昭和二十年八月十五日、日本国敗戦との大隊長より言葉があり、上官はじめ兵士たち皆涙をながしていたが、心の中は負けてはいなかった。

昭和二十年八月九日、朝起きて外を見ると、ソ連軍の戦車が部隊の周りに砲を向けていた。その後、各中隊に銃剣の返納の連絡があり、各兵士が三八式銃を、ソ連兵の目の前にて、おそれおおくも菊の御紋章のはいった銃を、鉄くずを捨てるように捨てた。銃は二山、三山と山となりました時、私は、日本国はほんとに敗戦の事だと初めて胸元が突きつけるような感じがしました。それから半月余りして、日本に帰るとの事で、「ノンジヤン」部隊を出発し、シベリア境の黒河まで昼夜と、夜は野原で野宿し三晩四日の行軍で、ソ連に近い黒河に着きました。その間に見た、日本兵士がソ連軍の犠牲により広野に野ざらしになって死んでいるのをたくさん見ましたが、ソ連兵がいるので残念にもなにもできず帰って来た事、今思い出すと、残念やら情けない事で、戦に敗れた事がしみじみ

身にしみついています。
　黒河にて船に乗船し、日本に帰ると思ったら、ソ連領「ブラゴエシチェンスク」に送られ、それから汽車にて北へ北へと送られ十日余りで着いた所は、アルハラ駅（二十四地区チタ）で今思えばシベリア鉄道の中程である。その間には、十月頃はソ連国ではジャガイモの収穫時期であり、広い農場を四カ所も「帰す、帰す」とうそを言われながらジャガイモ掘りをし、着いたアルハラ収容所に抑留され、二年間の、重労働生活で零下五四度の寒い中で働いた事が「義勇軍当時の長い訓練生活で得た知識判断力」が「生きて帰るの、一心で来た事が」戦後五十八年の今日思い出された事であります。（シベリアでの捕虜生活の苦しみは今も脳裏からはなれません）
　昭和二十二年十月「ウラジオ」より、日本の船「開拓丸」にて、舞鶴港に引揚げ上陸した。が、その時また、日本に外国兵が銃を持って立って居るのを見た時、ふたたび胸元がいたくなりました

が、心の中は生きるが一心である。一路親元に帰る事で舞鶴駅にて乗車し高岡駅まで来て下車した時は、またびっくり致しました。八年ぶりの高岡に着いた時はあまりにも変っていない事に気が付き、第二の満州王道楽土の建設を思い、日本は建築が大事であると思い、建築大工見習に入り、五年、十年と建築に努力でき、建築技術を身につけることができた事は、旧満州で開拓訓練当時に先輩の皆様方に、叩き込まれ、不撓不屈の精神の賜物と深く感謝しているところである。昭和五十五年より高岡地域建築組合長を務めさせて頂き、平成元（一九八九）年三月に高岡市長より、建築「技能功労賞」を頂きました。
　平成三年十月二十八日、義勇隊開拓団団長　川原豊作さんが、九十四歳にて他界され、葬儀に際し、会員の皆さんから私に弔辞を述べるよう要請があり、昭和十五年に内原訓練所に入所以来常に先生が口にしておられた「正義が亡びるなら、人間はこの世に住む必要はない」の言葉を引用させ

て頂き、代表してお別れの言葉を申し述べさせて頂きました。

平成七年にて人生七十歳となり、老後の事を思い、花と緑を心が安らぐ事と思い、県蘭協会高岡山野草協会に入会し老後を健康に生きる事と思いました。平成十年二月県蘭展示会にて思いもしていなかった県知事賞受賞し会員より喜ばれた。平成十一年三月山野草会より会長賞を受賞した事で会長より講師に招かれ山野草栽培について説明し出席の会員から喜ばれた。

平成十三年七月、老後の事と思い、岐阜の高陽社に入社。代理店として、冷え取り健康美容法に取り組み年間の実績が良くできた事で、平成十六年一月八日、年間「最大実績賞」受賞。そうこうしている間に戦後五十八年の年になり、自分史を作りたいと思っていた矢先に、シベリア抑留協会長山田秀三さんより、『平和の礎』の発刊の原稿募集の事で有り、高齢化で記憶が薄れ勝ちの今日、この事業を完成し、後、子孫に、私達の生き様を後世に伝えるための一助となれば幸いと思い、私の人生、戦前、戦中、戦後の思いを綴ったのであります。

現在も現役活躍　富山県満蒙開拓拓士会会長
富山県満蒙開拓神利会会長